(1)〜(9)は、上端を圭頭にした上で左右に二段の切り込みを入れ、下端を尖らせたもの、あるいは下端が折損しているものである。(1)の「安仁年」は年号には実在せず、私年号にも今のところ認められない。あるいは書き間違ったものと思われる。(4)(5)の両面下端は一cm程朱が塗られている。(10)〜(14)は、上端を圭頭にし下端を尖らせたもの、あるいは下端が折損しているものである。(15)は、縦に半分折損しているが、上部を五輪塔形にし、下部を尖らせたもので、「妙法蓮華経巻第一　方便品第二」の一節が記されている。

木簡の釈文については、国立歴史民俗博物館の平川南氏のご教示を得た。

9　関係文献

(財)山形県埋蔵文化財センター『後田遺跡・大道下遺跡第二次調査説明資料』(一九九四年)

山形県教育委員会『分布調査報告書(16)』(一九八三年)

(丸山晶子)

山形・亀ケ崎城跡

1　所在地　山形県酒田市亀ケ崎

2　調査期間　第三次調査　一九九四年(平6)四月〜八月

3　発掘機関　(財)山形県埋蔵文化財センター

4　調査担当者　小関真司・山口博之

5　遺跡の種類　城館跡

6　遺跡の年代　江戸時代

7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は日本海に面する庄内地方の港町酒田市にある。県内を縦断して日本海に注ぐ最上川と、月山をいただく出羽丘陵より発する新井田川が合流する三角州地帯に位置し、標高三mを測る。調査は本遺跡の大部分が県立酒田東高等学校の敷地内にあたっているため、校舎改築などに伴って行なわれており、本調査は第三次調査にあたる。

(酒　田)

亀ケ崎城は文明一〇年

（一四七八）遊佐太郎繁元が現在地に築城したと伝えられ、関ヶ原の戦いの際、上杉方の立てこもるこの城を、最上氏の大軍が容易に落せなかったという逸話が残っている。堀と土塁で囲まれた堅固な水城的性格の強い平城であった。元和八年（一六二二）酒井氏入部により出羽庄内藩が始まると、亀ケ崎城は支城となり城代が置かれて、明治維新まで続く。

木簡が出土した溝は、本丸と二の丸を隔てる内堀跡と考えられ、調査区の東側に、南北に帯状に続く形で検出された。しがらみの付属した根固め杭が多数出土し、その根元付近より珠洲系陶器片が出土しており、堀の造成は一六世紀以降と考えられる。

遺物集中出土地点はこの堀跡と、調査区西側に分かれる。近世陶磁器がほぼ半数を占め、他に槍身などの金属製品、椀、下駄などの木製品、硯などの石製品が出土している。特に朱漆の椀、黒漆に三方円字文の皿、在地産と考えられる近世の擂鉢などが、木簡と近接した位置から出土している。

8 木簡の釈文・内容

木簡は一点の出土である。形状より板塔婆ではないかと考えられる。

(1) 【ボ（バク）】法身無相□ (167)×40×3 061

9 関係文献

(財)山形県埋蔵文化財センター『亀ケ崎城跡第三次発掘調査報告書』（一九九五年）

（小関真司）